

1980年2月16日 アフリカ日食“243S”

川村幹夫

1980年2月16日、東アフリカ、ケニアにて皆既日食が見られる。かねてよりこの日を待ちのぞんでいた私は、準備おさおさ怠りなく、家内と長女の3人で広電アフリカ観測隊に参加、2月12日勇躍日本をあとにした。

☆ハプニングの数々……長期旅行、それも海外旅行ともなるとハプニングはつきもの。次にその数々を披露すると、

【その1】出発の朝、羽田に集合し全日空機で大阪へ行きそこで関西グループと合流してエア・インディア305便に乗ることになっていたが、羽田集合時刻の8時50分になっても広電の添乗員が現れない。集まっている我々は気が気でない。9時になった。まだ現れない。我々は気もそぞろである。どうしたのか、何があったのか？9時10分頃やっと現われたがもはや全日空機には間に合わない。当人の顔はまっ青である。

あとでよく処によれば、交通事故のため遅れたという。東京の交通事故は毎日のことである。なればこそ、我々は万一のことを考えてかなり早目に集まっている。しかるに肝心の添乗員が出発に間に合わないほど遅れるとはあきれた話である。

【その2】日食の前々日(14日)マリンドの海岸に建っている三文ホテル(としか形容のしようのないホテル)に泊ったが、その夕食の時、長女が「キャー」とすさまじい叫び声をあげて飛び上った。全員総立ちとなって何事ならんと見まわすに、なんと巨大なアフリカヤスデがトグロをまいている。日本にいるヤスデは赤っぽい色のマッチ棒ぐらいの大きさだが、このアフリカヤスデはまっ黒で、太さは大人の親指ほど、長さは15センチくらいある。長女が悲鳴をあげるわけである。

【その3】その三文ホテルに泊った翌朝、水音がきこえるので私が起きてみると、なんと室の床が大洪水である。ビックリしてホテルの人をたたき起こし調べた処、隣室の外人がシャワーを出し放して寝たため、あふれた水が廊下をつたわって私の部屋まで浸水したものと判明。モップでふくやらバケツに汲みとるやら大騒ぎであった。

【その4】日食前日、ケニアの東海岸でリハーサルを行なったが、その砂地にバスが埋まって動けなくなるというハプニングが発生した。そのため炎天下の海岸に夕方まで足止めされてしまった。結局全員で力を合わせ脱出したが、一時はどうなることかと思った。

【その5】日食当日、観測地へ向かうべく我々が「ケニア特急」と名付けたトラック改造のバスに乗って出発し、およそ10分くらい走った処で一行中のY先生が忘れ物に気がついた。スワ一大事、ただちに引き返し、事なきを得たが、時速100kmくらいで走っているから、往復20分間で約30km以上のロス。その間、路上の現住民が往復とも同じ場所でケゲンな顔で見送っていたのが印象的であった。

☆ケニアの天候……日食観測に当って空模様は一番気になるものである。そこで、東大、京大、水路部などの観測隊の所に行き話をきいてみた。それによると、このところ約1ヶ月間というものは必ず曇り、正午頃まで雲があるが、午後は晴天で夕方まで快晴がつづく。このパターンのくりかえしであるとのこと。したがって、現地時間で11時前後におきる皆既日食時の空模様は、この天候のパターンから推察するときわめて微妙なことになりそうである。しかし、天候ばかりはいかんともしがたい。すべてはアラーのおぼしめしに従うことにして、当日を待った。

☆1秒間2,000円の皆既日食……日食前日はリハーサルやらバスが砂に埋まるやらで宿泊地へ着いたのが遅く、全員疲れはてたためか、最も重要な明日(日食当日)の予定を変更し、近くのマリンデ海岸で行なおうという意見が出た。しかし、それでは折角のリハーサルがむだになるし、だいいち、皆既継続時間が約23秒間ほど短い。私達が当初予定していた観測場所は日食中心線上であったが、その皆既継続時間は243秒である。リハーサルした場所は当初の予定地とは違う場所だが、皆既継続時間は変わらずやはり243秒である。今回のアフリカツアーの費用をこの時間で割ると、1秒間約2,000円につく。マリンデの皆既継続時間はおよそ220秒だから23秒ほど少なく、これは実に46,000円程に相当し、それだけ損をすることになる。結局、スケジュール通りということになり、観測地「ゴメニ」小学校々庭に布陣した。

☆美しかった高層雲の中のコロナ……ゴメニ小学校はマリンデの北東に位置し、 $\lambda - 40^{\circ} 8' 3''$ $\phi - 2^{\circ} 56' 6''$ 。広大な砂地の校庭で緑陰があり快適な観測場所である。

当日の天候はいつものパターンと少し違い、朝のうちは快晴であったのが、第1接触近くになって雲が出始め、一面に広がってしまった。しかし、食が進むうちに雲が薄くなり、やがて高層雲のみとなったので、このぶんならコロナは見られるであろうと思われ、ホッと胸をなでおろした。

皆既のおよそ1分前頃、近くのイタリア軍観測基地から観測用ロケット4発が次々と打上げられ、空に吸いこまれるように上昇してゆく。とともに、その轟音があたりを圧するがごとくひびきわたり、すさまじいばかりであった。ゴメニに布陣したグループだけが見た珍しい光景で、マリンデでなくてよかった、とつくづく思ったものである。

やがて、アラーのつくり賜う一瞬の芸術、ダイヤモンドリング、ベイリービーズが次々と現われては消え、そして美しいコロナと変った。

私はTSP2型赤道儀にケンコーテレプラスをつけ、ニコンFEのボデーのファインダーを注視しつづけていたが、ダイヤモンドリングとなる相当前から内部コロナが黒い月の全周を取りまいているのが観察された。また、プロミネンスは望遠鏡を通して見られたが、肉眼では見えず、5cm×7のモノキュラでもよく見えなかった。ベイリーのビーズはダイヤモンドリングとなる頃より現われ、完全皆既になるまで見られた。内部コロナは非常に明るく、輝くほどである。外部コロナは折からの高層雲に散光し、肉眼では左程広がって見えず、太陽半径の1.5

倍～2倍ぐらいまで、その外側は雲に溶けこんでいるようであった。皆既中の空は意外に明るく、ライトなしでカメラのシャッター目盛が楽に見えるほどである。

望遠鏡で見る外部コロナは銀線を束ねたような、というか風になびく洗い髪というか、とにかくそのような線状の集まりのように見える。内部コロナは雲状と線状の集合体のようになって、極めて複雑である。プロミネンスは周囲数個所に見えたが、どれも小さく、目立って大きなものはなかった。

なお、皆既中の空に、金星と水星が見られた。

皆既中の空は、家内の観察によると、コロナの周辺は薄墨色にかげり、その外側は青黒く、特に北及び北東方向はまっ黒で異状である。西及び西南方向は天頂から地平線にかけて青黒→薄墨色→黄橙色→橙→赤→黒の順になっていて、それが時間の経過とともに西方へ移動してゆく。

どこからかニワトリのなき声がきこえる。山羊のなき声もきこえてくる。皆既前にまわりにはいた数人の現住民はいつの間にか姿を消し、人影は我々のグループだけである。あとできいた処によれば、現住民は皆既中みんな家にひっこみ、何ごとかお祈りしていたという。

私達は高い金を払ってまでわざわざ日食を見にくるというのに、現住民は居ながらにして見られるのに、皆既中は家に入って見ないという。何ともったいない話ではないか。

243秒がすぎた。アラールの最後のおめぐみであるベイリービーズ、ダイヤモンドリングが再び現われ、そして強烈な太陽がすべてを消し去った。

太陽はまだ欠けている。しかし、主たるスケジュールは大過なく終った。全員緑陰に集まり、私が香港で買い求めたナポレオンで乾杯し、成功を喜びあった。

☆ヤンの木陰の大パーティ……日食終了後「ケニヤ特急」で宿泊地であるワタムへ戻る途中マリンデのレストラン兼ビアホールへ立寄り、ケニアビールで再び乾杯したが、このときのビールのうまかったこと、暑かったせいもあるが、それにも増して勝利の美酒の感が強かったであろう。

ワタムは白砂、青ヤンの美しい海岸をもつリゾート地区である。帰営後この海（インド洋）でしばらく泳いだ。水が清く、気持ち良かったが、猛烈に塩辛い海水で、身体が楽に浮く。

夜、私が日本から持参したお赤飯、五目飯を分けて食べ、日食観測成功を祝った。

食事のテーブルはヤンの木陰にある。頭上には南天の星が輝き、南十字星も昇ってくる。

みんなでビールを飲み、陽気に歌い、拍手し、そのうち、近くにキャンプしていた外国人一家も加わり、大合唱となった。白人も黒人も国籍もない。みんなスペースフレンドである。

このとき、黒人ガイドのピーター氏が唄った「マライカ」という歌は実にいい歌で、私はそれをカセットに録音しておいた。このロマンチックな夜も、南十字星が高くなる頃おひらきとなったが、日本で見られない星々を遅くまで眺めている人達もいた。

翌日はツァボウエストへむかい、キマナロッジに泊まり、そしてアンボセリにカメラサファ

リなどをしたのち、帰途インドのボンベイへ立寄り、2月22日全員無事帰国した。

☆日食観測旅行、その他の反省……日食観測旅行は一般の観光旅行といささかそのおもむきが異なり、あくまでも日食観測が主であり、その他は従となる。故に未知の観測地の下調べには十分な時間を必要とする。現地人との融和も重要問題である。外国人の土地を勝手に使うわけにはいかないからである。地形の良否も観測に影響を及ぼす。時間に余裕があれば適する場所を色々探しまわるが、余裕がないと悪い場所でがまんをせざるをえなくなるであろう。

日食観測には器材を多くもっていくから、それらの整理や手入れにもかなりの時間と場所を要する。その点、今回のツアーはあまり上等とはいいがたい。最も悪かったのはケニアに着いてからスケジュールが変更しかかったことである。旅行スケジュールというものは客と旅行社との契約である。それが現地へ着いてから旅行社が勝手に変更したのでは迷惑も甚だしい。

次にいけなかったのは、日食前日の宿泊がキャンプだったことである。それも観測地から数十軒も離れたワタムだったことで、遠いぶんだけ朝早く起きねばならず、肉体的にきついことであった。これも旅行前の話ではマリンデ泊りとなっていたのが現地でワタムになったもので、いわば契約違反である。広電はもっとハッキリした現地の状況を私達に前もって説明すべきであったろう。もっとも、結果的にはヤシの木陰のパーティなどロマンチックで楽しかったが。

とにかく、アフリカ日食は終わった。次はジャワ日食をめざして今からせっせと貯金することにしよう。

おわりに、渡哲也の唄った「くちなしの花」の替え歌「アフリカの花」を作詞しましたので、それをのべてペンをおきます。

「アフリカの花（“くちなしの花”替え歌）」

いまでは地球もせまくなり、 ジェットでひととびアフリカケニア
サバンナに咲いた、 花のかおりが、 旅路の疲れをなぐさめる
アフリカの、 知らぬ花、 コロナのような、 花だったよ。